



Title	なぜ臨床哲学を学んでいるのか
Author(s)	小川, 長
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 28-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79244
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集 1 臨床哲学の今——在学院生・修了生によるエッセイ

なぜ臨床哲学を学んでいるのか

小川 長

ボクは、地方の公立大学に籍をおく経営学者である。研究職に就いて間もなく 10 年の歳月が経過しようとしており、65 歳の定年まであと 3 年となった。一方で、ボクは現在、大阪大学で臨床哲学を学ぶ大学院生でもある。社会人ということで 5 年の長期履修制度を認められているが、早いものでそれも残すところあと 1 年となってしまった。だから、今のボクは、一方で大学院生として臨床哲学を学びながら、もう一方で大学生や大学院生に経営学を教えるという少しややこしい立場にある。しかし、教育の世界では、「教えることは学ぶことである」とよく言われるし、ボク自身も日頃からそれを実感することが多いので、ボクの中に違和感はない。だが、考えてみれば 58 歳にもなって大学院生となり、下世話な話だが、普通の大学生や大学院生が納めているのと同額の入学金や学費を納めているということを知れば、何と物好きな者もいるものだと思える人も少なからずいるのではないかと思う。その証拠に、家人などはもう既に呆れ果てている。なぜなら、これが初犯ではないからである。

では、ボクはなぜ、そうまでして臨床哲学を学んでいるのだろうか。大学院在籍最終年度を前に、改めてそのことを考えてみることはボク自身にとっても意義深いことだし、今のボクにできることで、臨床哲学に興味のある方々に少しでも役立つ可能性があると思えば、それをお伝えすることぐらいだと思う。そう考えて、恥を承知で駄文を認めようと思うが、これは、ボク自身を臨床的に分析することなのかもしれない。

なぜ、臨床哲学を学んでいるのかということに答えようとする、まず「学ぶ」とはどういうことなのだろうということが頭に浮かんでくる。ボクには、以前からそんな癖がある。逆説的だが、ボクが臨床哲学を学んでいるのは、そうしたことを丁寧に考えるフィールドに身を置きたいと思ったからであった。ではなぜ、そうなったのかをお伝えするためには、読者には退屈だろうか、そこに至るまでのボクの事情を語る必要があるだろう。

ボクは、40 年ほど前に大学を卒業して大手証券会社に就職し 18 年間勤めた後、40 歳の

時に早期退職制度に応じ職を辞した。その後、いわゆるフリーターのような感じでいろいろな仕事を転々とし、家族の生活費と自分の学費を稼ぎながら暮らしていた。なぜ、そのような生活をしていたのかというと、ボクが大学院で学んでいたからであり、学費とはそのための学費だったのである。こうしてボクは、証券会社を早期退職してから、名古屋市立大学大学院経済学研究科の修士課程を修了した後に、神戸大学大学院経済学研究科の博士後期課程を修了し、博士（経済学）になった。そうしたのは実は、研究者になりたいと考えていたからである。つまり、仕事を転々とする不安定な生活を送っていたのも、わざわざ大学院に入り直して学んだのも、研究者になるための可能性を追い求めていたからであった。こうしたことを真剣に考え始めたのは、社会人大学院生として修士課程で学んでいた時、同じ社会人として既に修士課程を修了し、同じ研究室の博士後期課程で学んでおられた K さんが、博士の学位を取得後、サラリーマンから大学の教員に転職されたのを目の当たりにしたからである。

そもそも、ボクが大学院に入った背景には、ボク自身の大学入試の失敗に遠因があったように思う。志望していた国立大学の文学部を落ち、滑り止めのつもりで受験していた私立大学の法学部に唯一合格し、結局その大学に入学した。行きたかったわけでもない大学で、興味の分野など勉強する気にもなれず、入学当初こそ、まだ高校生活の延長の名残から真面目に大学に通っていたが、次第に大学に行かなくなってしまった。その頃から、本をよく読むようになったと思うが、それは本を読むことの楽しさを知っただけではなく、心のどこかに、大学入試の失敗を取り返したいという思いがあったからなのだろうと思う。ただ、そのことによって本を読む習慣が身に付いたのだとすれば、その点は怪我の功名だったことになる。

さすがに、大学にも行かないような人間が及第点を取れるほど世の中甘くはなく、3年生が終わった時点でボクの成績は目も当てられないほど惨憺たる状況となっていた。仕方なくボクは覚悟を決め、きっぱりとアルバイトも辞めて朝から毎日大学へ通い、登録したすべての講義に出席することにした。さらに、すべての講義を最前列の中央、すなわち教壇の真ん前に座って聴講した。因みに後日、大学院で学んでいた時も、このやり方を通した。こうして毎日、朝から夕方まで目の前で先生の話の聴き続けていると、少しずつ勉強の面白さがわかってきた。ボクには、まったくのお門違いだと思っていた法学の専門科目でさえ、学んでいるとだんだん興味が湧いてきた。ボクは愚かにも、大学生活がもうすぐ終わるという段になって学ぶことの楽しさ、学問の面白さに気づいたのである。のちのち、何ともしない

いことをしたものかと何度思ったことだろう。ボクが実際に過ごした大学生活は、ボクの人生の貴重な経験であり、それ自体を悔いる気持ちは毛頭ない。しかし、もし、下らないプライドなど持たず最初からきちんと取り組んでいれば、こうして歳を取ってから悪戦苦闘しなくても、もっと早くから学問の道に入っていくことができていたかもしれないなどと、ふと思うこともある。

卒業後、就職した証券会社の仕事に日々、朝から晩まで追われるようになると、やがて学問のことなど頭から消え去ってしまった。ただ、その後も本を読むことだけは止めなかった。それは怪我の功名で得た習慣と、卒業前のわずかな時間味わった学ぶことの楽しさの名残だったのだろうと思う。当時、あくまでも読書はボクの趣味であり、本を読んだり、それについて考えたりすることは趣味である限り、仕事よりもプライオリティが低いことは分かっていた。しかし、日々ノルマを追い掛け、毎時、手数料を集計されるような仕事に対して常に疑問を感じていたし、そうかと言って、それほど嫌で堪らない仕事なのに辞める勇気もなかった自分を持て余していたボクにとって、意味を見出せないような仕事よりも、明らかに本を読む方がアドバンテージは高かったのである。

ボクが密かに研究者になりたいと思っていた理由は、研究者になれば本を読んだり、考えたりすることを仕事にすることができると、単純に考えていたからである。当時のボクにとって、本を読むことが学ぶことであった。特に分野を決めて読むわけではなく、目に付いたもの、誰かが薦めていたもの、読んだ本の中で紹介されていたものなど、その時々興味に任せて本を読んでいた。ボクは、ほとんど大学に行かなかったし、ゼミナールも途中で止めてしまったので、学ぶ作法というものが全く身に付いていなかった。しかし、そのお陰でジャンルや作法に囚われず、自由にいろいろな分野の本を読めたのかもしれない。本を読むのは、知らないことを知るためであり、知っていると思っていることを確かめるためだったが、知っていることが増えてくると、それを基にいろいろなことを考えるようにもなった。そうすると、その考えが正しい考えなのかどうか、もっといい考えがあるのではないかと本を読むでは、また考えるようになった。

そんな折、日経新聞で社会人大学院生の募集記事を目にした。名古屋市立大学大学院経済学研究科が修士課程の社会人大学院生を若干名募集すると書いてあった。ボクは、経済学という学問がどのような学問なのか全く知らなかったが、新しいことを知りたいと思った。ボクは証券会社に十数年も勤めているのだし、嫌でも毎日、日本経済新聞を読んでいるわけだから、経済学が全然分からないなどということはないだろうと考えて受験した。どんな試験

だったか忘れてしまったが、何とか合格できてボクは大学院生となった。本格的に経済学を学ぶには、数学をマスターしなければならないことを、その時初めて知った。英語の文献を読まなければならないことも初めて知った。社会人向けの講義は平日の夜間と土曜日の開講だったが、毎日仕事が終わるのは夜遅かったのも、否応なく土曜日に開講されている科目を受講せざるを得なかったが、そこは日頃のジャンルに拘らない読書習慣のおかげで、どの科目も当たり前のように興味深く学べた。やはり、何でも知りたいと思っていたからだろう。そうこうしているうちに、ボクは熊本に転勤になり、やむなく大学院を休学することになった。

しばらくして、バブル崩壊の影響で証券不況となり、勤めていた会社に早期退職制度が導入されることになったが、ボクにとっては踏ん切りをつける絶好の機会となり、18年間勤めてきた会社を何の未練もなく辞めた。辞めた理由は、本当にその仕事が嫌だったことその他にもいくつかあったが、その一つに修士論文を書き上げてケリを付けようという思いがあった。ボクは大学院に復学し、1年間失業保険を受給しながら指導教官から論文作成の指導を受けた。ボクの論文は、株価レーティングに関する実証分析で、コンピュータを使った膨大な株価データの統計分析の結果から知見を得る手法を用いた。こうして、ボクは初めて系統的に研究する方法を知り、論理的に表現する方法を知った。つまり、研究作法というものを知ったのであるが、何よりも大きな収穫は、それぞれの学問にはそうした作法があるということ自体を知ったことだった。こうしてボクは、修士（経済学）になった。

その後、この論文を先生のご指導でリバイスして、始めて学会発表を行った。さらに、その論文を先生との共著として投稿すると、査読を通過して学会誌に掲載された。ビギナーズラックを絵に描いたような出来事だったのだが、当時のボクは無知にもそんなものかと思っていた。そして、なるほど、これが業績というものなのかという実感を掴むことができた。

その年の4月に、地元の専門学校へ就職して簿記やビジネス・スキルなどを教えながらも、研究者の公募に応募していたが、片っ端から書類落ちとなった。そこで、ボクが思い付いたのは、博士を取れば何とかなるのではないかという単純な発想だった。実際に、ボクは受験準備をして翌年、神戸大学大学院経済学研究科の博士後期課程に入学した。そして、研究する時間を確保するため、再び定職を辞めた。研究テーマは修士論文に引き続き、株価レーティングの実証分析だった。ボクは、修士時代に教わった研究方法を応用して、より広く、より深くこの分野の研究を進め、新たに2本の査読論文を上梓した。大掛かりに行った米国市場に関するサーベイ論文と、査読論文をまとめた内容を博士論文に仕上げ、結局4年

の歳月を掛けて博士（経済学）を取得した。

だが、博士の学位は得たものの、やはり公募には落ち続けた。さすがにこれ以上、フリーターのような生活はできないと思い、その年、中小企業診断士の資格を取得し、経営コンサルタントとして独立した。この経験は、ボクに貴重な知恵を与えてくれた。それは、自分が正しいと信じたことを貫けば、必ず理解者は現れてくるということと、自分が間違っていると思う仕事を、敢えてする必要はないということだった。経営コンサルタントとなってから3年間、仕事は順調に進み、クライアントも増えてきた。そこで、今後は経営コンサルタントとして生きていこうと決めた矢先に突然、研究者への道が開けた。経営コンサルタントを経験したおかげで、52歳にして遂にボクは経営学の研究者となったのである。人生とは、まさに糾える縄の如しだということをつくづく実感した。

研究者になってから、ボクは遅れ馳せを取り戻そうと旺盛に論文を書いた。経営学の研究作法に則り、多彩なテーマで論文を執筆した。しかし、そうこうしているうちにボクは、よい経営とは何かということを考え始めるようになった。そして、それは人を大切にすることだろうと考えるようになった。一般に、企業は利潤追求の主体だと定義されるので、それに従えば、よい経営とは利潤の最大化をもたらす経営だということになる。確かに、大きな利潤をもたらすこと自体は悪いことではないし、利潤の大小を言えば、大きいに越したことはない。しかし、もし人を犠牲にしたり、蔑ろにしたりすることによってその利潤がもたらされているとすれば、それが、よい経営だと呼べるのだろうか。また、多くの経営学研究者たちの視野に、そのように犠牲になったり蔑ろにされたりしている人の姿が映っているのではないかと考えるようになった。

そうなると、もう経営学の範疇だけでは収まりが付かなくなってきた。そこで、「よい」ということや、「人を大切にする」ということは、どういうことなのかを考えることができるフィールドを求め、ボクは今、こうして三度目の大学院生となっているのである。

振り返ってみると、ボクが本格的に学問に取り組むようになったのは40歳の早期退職後ということになる。また、ボクには系統立って学んだ学問分野がなかったことにも今さらながら気づく。言わば、根無し草のようなものだが、その分自由に考えることができてきたような気もする。今、ボクがこうして臨床哲学を学んでいるのは、結局、ボクは何をしてきたのか、ボクとは何者なのか、そして、どこへ行こうとしているのかを考えるための、最後のトライアルのような気もしている。